

幼児生活団幼稚園

幼児期に大切な遊びからたくさんの学びがある

幼児生活団幼稚園長 栗原美枝子

この世に生を受けて生まれてきた子ども達一人ひとりは、各家庭で大事に育てられ成長していくことを誰もが望んでいることである。しかし変わりゆく社会の中で、頼れる人がなく「孤育て」をしているご家庭が殆どである。また早期教育に熱心になりがちになってしまう社会（評価される）の中で、育てにくさを感じているご家庭も多い。本来子どもの持っている力を引き出すことが大事で、そのためにはほとんども遊び込むことを保護者の方々に理解していただきながら、生活団では遊びを中心に子ども達が自分たちの世界で共に影響されながら育っていかれる環境を作ってきた。

I.異年齢交流(3学年)

一学年一クラスの小規模な幼稚園である強みを生かして、クラス活動ではなく三学年が交じり合う異年齢保育を取り入れて子ども達自身がお互いの姿を見て大人に教えてもらうのではなく、子ども達の世界の中で気づき、あんなふうになりたいと憧れを持ち生活をしていく中で相乗効果を生み出せる環境を目指してきた。

異年齢保育とは一クラスで決まったカリキュラムを進めることとは違い、大人たちがコミュニケーションをとり周りの保育の進め方に目を向け、その意味を瞬時に理解し進めていくことが必要となってくる。

そのためには、普段から職員同士で保育の振り返りや環境作りの話し合いの時間をしっかりと設けて、職員全員が同じ目的に向かって歩まなくては出来ないことである。

職員会議の進め方や保育後に行う昼礼の話し合い方を工夫して、それぞれが自分の思いを伝えあえる職場の雰囲気づくりに努めてきたが、お互いを認め合い受け入れるということが、それぞれの現場で保育を経験してきた者にとっては難しいことであった。

子ども達が「幼稚園は楽しい」「お友達と一緒に遊びたい」「知りたい」「やってみたい」「出来た」という思いをたくさん経験できるよう今後も保育環境を整えていく努力を教職員全員で目指していく。

II.異年齢交流(他部との交流)

一貫校である自由学園の環境の特色として他学年(他部)との交流によって子ども達が刺激し合って成長していくことがあげられる。生活団幼稚園の敷地が学園キャンパス環境

内にはないので普段の生活の中で他部と自然に触れ合うことは少ないが、授業の一貫で生活団に来てくれる生徒が昨年より増えて交流の回数が増えてきている。大きな行事で関わるだけでなく、学園キャンパスに散歩に行った時など生徒の休み時間に重なり、授業での関わりとは違う生徒の素の姿で小さい子どもに接してくれて兄弟、家族のような温かい関係性が見えてきた。

授業で生徒たちが生活団に来るときには事前に打ち合わせをして学びのねらいや園児達の成長、活動の流れなどを互いに共有してきたが、生徒に細かい注意点や生活団の子どもの姿などを伝える時間が少なかった。今後は交流前の準備を丁寧に行っていく。

兄弟、姉妹のいる園児が少なく一人っ子の子どもも多い中で、他部のお姉さん、お兄さんとの関わりは大変重要な関わりである。幼稚園の先生とは違う大人(年上)との関わりは、子どもにとって甘えられる存在であり憧れの存在でもある。実際に言葉を交わし一緒に遊ぶ中でそれぞれが自分とは違う存在であることを認めていってほしい。

III. 様々な存在があつてこそその集団生活

学園には海外からのTA(ティーチングアシスタント)の先生方がいらっしゃる。英語の先生と一緒に来てくださり、英語の歌や手遊びを教えてください体操会前後には一緒に運動遊びをしてくださる。最初は遠巻きで見ている子どもも先生達が笑顔で接してくださる姿を見て、少しずつ心を許し表情が柔らかくなってくる。

幼稚園のクラス内では、韓国・中国・イタリア・ベトナム国籍の子ども達が一緒に過ごしている。目や髪の色の違いやTAの先生方の言葉の違いに気づくが、そのことの一つ

を不思議に思う前に一人の存在であることを当たり前のこととして理解して接していることは毎日の保育をしていく職員にとってうれしい姿である。一人ひとりが違った存在で得意、不得意なことがあることも当たり前、それらを周りの人たちが協力をしてカバーしていく中で集団が出来上がっていく。大人である私達も自分の苦手な部分を隠すのではなく助けを求め一緒に同じ方向を目指すものとして進んでいかれる仲間であってほしい。そのように小さい子どもに対しても一人の人として向き合っていくことを大切にしている。

IV. 保護者同士の働き、コミュニケーション

幼稚園は子ども達が安心して過ごせる環境であることと合わせて、保護者も通ってよかったなと思える環境と子育てをしている仲間が出来て親としても成長出来る環境であってほしい。

今年度からクラス委員を3人から2人に減らした。これまで委員からの発信（掃除の呼びかけ、クリスマスの贈り物の係り等）が多く重荷になり、保護者同士での関わりにも支障をきたすことがあったので委員からの発信を幼稚園発信にして委員の負担を軽減してきた。

今までの保護者活動は卒業生の保護者がリードして行っていたが、最近では若い保護者（生活団を経験していない方、自由学園の卒業生ではない方）が率先して委員を引き受けて幼稚園と共に子育てをしていこうとする動きがあり、その方々が保護者会の活動を見直して今の状況にあう関わりを模索しながら活動をしている。

それぞれの場所で幼稚園の力になろうとする環境を生み出し、働いている方や弟妹のお世話などで幼稚園に足を運ぶことが難しい方も幼稚園に行かないでも力になっていることを感じられるようになってきた。

今後も社会に合わせて保護者の立場になり、幼稚園と一緒に子どもの成長を見ていかれる環境作りと保護者へ寄り添いを続け、「孤」ではない「子育て」をしていく。

V. 預かり保育との連携

預かり保育は、保育後お迎えに来られない園児を親に代わって家庭的な雰囲気の中で異年齢と共にお迎え時間まで過ごすことをねらいとしている。

その為には預かり保育担当者が、一人ひとりの特性を理

解して保育後の預かり時間をしっかりと見ていくことが必要となっている。預かり保育担当職員は、日中の保育にフリーとしてクラスに入り、日中の子どもの姿や、担任との関わり方等を理解、共有し預かり時間も同じ目線で保育を進めることを目指してきた。実際には預かり事務仕事やプレ保育の担当にもなっていたので、日中の保育に入ることが難しく担任達との連携がスムーズにいかないこともあったが、その都度コミュニケーションを図りクラス担任が預かりに入る等して、子どもの預かり時間の充実を目指してきた。

今後は預かり人数が増えていくことを考え、預かり保育担当者はプレ保育との兼務を辞めて、日中の保育に入れる時間を増やしていき連携を強めていきたい。

VI 目指していく幼児教育

社会が変化していき子どもの数も年々減少していく中で、子どもへの理解や子どもにとっての大事な役割が難しくなっている。

本来子どもにとって大事な3年間である幼児教育は、創立者が「幼子は自ら生きる力を与えられているもので、しかもその力は親たちの助けやあらゆる周囲の力に勝る強力なものだということ。その強い力が私達に何を要求しているかを知ること」と記している。注1

私達は、子ども達に何かを教えてあげる、ということを考えがちだが、そうではなく子ども達の大きな力を見つけ出し、その子ども達が何を要求しているのかを素早く受け取りそれらが実現できる環境を作り上げていくことを日々考えていながら保育をしていく。

参考文献

注1 羽仁もと子『羽仁もと子選集 おさなごを発見せよ』婦人之友社、8 頁